

新進作家から見る デジタル時代における身体とその思考

～表現の時代背景から～

東京都写真美術館 学芸員

山峰潤也

新進作家から見る デジタル時代における 身体とその思考

～表現の時代背景から～

山峰潤也

はじめに

20世紀を「映像の世紀」と呼ぶとすれば、21世紀は「インターネットの世紀」と言ってよいだろう。私たちを取り巻く情報環境は劇的に変化している。そうした新しい状況の中で育ってきた新しい世代の表現を検証することで、情報環境が私たちの身体感覚や思考に与える影響と、今日におけるメディアと表現の関係について考察していく。

映像の世紀前夜の1895年、リュミエール兄弟（Auguste Marie Louis Nicolas Lumière, 1862-1954）（Louis Jean Lumière, 1864-1948）がパリのグラン・カフェ地階の「サロン・ナンディアン」で上映した汽車が駅に到着する映像を見た人々が、慌てて逃げ出したという有名な逸話がある。しかし、日常的に映像を見ている私たちは、ドラマの登場人物が画面越しに拳銃を突きつけようと、その銃口から身をかわそうとはしない。19世紀末と21世紀初頭ではメディア環境がまったく異なり、20世紀を経て私たちの身体感覚は大きく変わっていったのである。19世紀末の人々は、スクリーンの向こう側の汽車を、実体か虚像かの判断をすることができなかった。それは、映像と現実世界の分かれ目が彼らには見えていなかったことを意味している。一方、映像の発明から1世紀以上を経た今日に生きる私たちは、テレビやスクリーンの中とそれを見る人々の世界が隔てられていることを、当たり前のこととして理解している。

しかし、今日起こっている、高速なメディア環境の変化が私たちにもたらす影響をつぶさに理解していくことは非常に難しい。それでも私たちは、消費や通信、コミュニケーションなど生活に関わる一定の場面において、情報インフラの発達に保障された新しいメディア環境を利用しながら、次第にそれに慣れて行く。そのプロセスを繰り返す中で、私たちの身体性は大きく変わろうとしているのではなかろうか。そうした変化に自覚的でいられるだろうか。それができなければ私たちを取り囲む世界のブラックボックスが拡大していくだけであろう。

そうした状況の中、新しいメディア環境を読み解く鍵となる作品が、インターネットとともに育った世代から生まれようとしている。自分自身がおかれている環境を客観的に捉え、分析することは容易ではない。しかし、鋭い観察眼や感性によって、新しいメディア環

境を映し出す作家が育ちつつある。新しい世代の表現を読み解くことは今日の情報社会を捉え直す手がかりとなりえる。モバイル端末やビッグデータ、SNS、著作権、個人情報や機密情報とその漏洩の問題など、枚挙にいとまがないトピックが複雑に絡みあう時代を読み解く上で、今、生まれてくる表現を継続的に調査することは、非常に重要なテーマである。本稿では、そうした新しい表現に対する議論を深めるために、現在のメディア状況を整理するところから始めて行きたい。

I. インターネットというメディア環境

1995年に開かれたインターネットという新しい地平は、特定の人々しか関与することのできないマスメディアに対して、新しい時代の旗手が群雄割拠する未開のフロンティアだった。2005年に水越伸(1963-)が発表した『メディア・ビオトープ メディアの生態系をデザインする』^{❖1}では、新しい情報環境(メディアを取り巻く生態系=ビオトープ)から生まれ得る小規模メディアとそのコミュニティが土壌を奪い、マスメディアという巨木を倒していくというモデルが描かれていた。それは、ポストモダンを浸透させたジャン＝フランソワ・リオタール(Jean-François Lyotard, 1924-1998)が述べた「大きな物語の終焉」が意味する、一つのイデオロギーを柱とする社会から多元社会へ向かうモデルとも重なり、その実践的なモデルと捉えることもできた。20世紀後半、ポストモダンという言葉のもとに、「大きな物語」から「小さな物語」へと推移しようとする時代の中、民衆からの矛先をいなしながら民衆支配を促すアノニマスなイデオロギー装置として、マスメディアは90年代に入ってもなお、強大であった。しかし、2000年代に入り、回線の高速化、サービスの多様化に伴い、インターネットは既存のマスメディアを脅かす存在となった。

Googleなどの検索エンジンの発達により、ユーザーが求める情報と発信者の直接的な結びつきが促進され、FacebookやTwitterに代表されるSNSは新しいコミュニケーションの場を生み出し、ユーザーの知識を資源に日々精度を高めるWikipediaや動画投稿サイトのYouTubeなど、多種多様な新しい情報サービスが現代社会のインフラとして定着しつつある。この十数年で、40代以下のテレビの視聴時間が年々減少しているというデータ^{❖4}からも、人々の情報源がマスメディアからインターネットへと移行していることがうかがえる。

1995年以降、一般の利用が急速に拡大し、さまざまな開拓者たちがしのぎを削ってきたインターネットの世界だが、今や独自のアルゴリズムで検索システムを構築し、急成長したGoogleが周囲を大きく突き放している。インターネット上の膨大なコンテンツとユーザーをつなぐ窓口、検索エンジンを握るということは情報の流れをコントロールできることを意味している。Googleは、この圧倒的なアドバンテージを元手にさまざまな先進的なプラットフォーム開発や企業買収を進めており、新しいメディアの覇者となった。

❖1 水越伸『メディア・ビオトープ メディアの生態系をデザインする』紀伊国屋書店、2005年

❖2 SNSとは、ソーシャル・ネットワーキング・サービス(Social Networking Service)の略称で、社会的ネットワークを構築できるサービスを意味する。音楽専門のMyspaceや日本のmixiなどがある。Facebookは2014年1月時点で、13.1億人のユーザー数を誇る。(Statistic Brain Research Institute調べ)

❖3 ウィキメディア財団が運営しているインターネット百科事典。コピーレフトなライセンスのもと、誰もが無料で自由に編集に参加できる。世界の各言語で展開されている。

❖4 諸藤絵美、渡辺洋子「生活時間調査からみたメディア利用の現状と変化～2010年国民生活時間調査より～」、『放送研究と調査』2011年6月号、NHK放送文化研究所、p.49

一方、ハードウェアの観点から私たちの日常を変えたもの、それは Apple の iPhone や Google の Android などに代表されるスマートフォンである。それまでオフィスや自宅での使用に限られていたパソコンを、インターネットに常時接続した状態で持ち運ぶことを可能にただけでなく、携帯電話として普及することにより、これまでのパソコン市場を大きく上回る市場を開拓した。スマートフォンの出現によって、道に迷うことがなくなり、日常の出来事を即座に友人と共有し、近くにあるレストランを即座に調べ、店で見つけた商品の最安値をその場で調べて注文するなど、私たちの日常はインターネット上のあらゆる情報、あるいは遠隔地にいる友人と、常に「つながった」状態となったのである。Apple や Google によるスマートフォンは、これまで通信会社が持っていた携帯業界における優位性を解体し、メーカーによる端末のイノベーションを活発にした。⁵その結果、デジタル機器とそれまで疎遠だった人々までもがデジタル機器を持ち、誰でもどこでもインターネットにアクセスするようになったことは非常に大きい。⁶

これらの状況変化は、放送や通信だけでなく、消費にも多大な影響を与え、20 世紀型のさまざまな巨木にまで影響を与えつつある。しかし、一方で新しい土壌にそだった樹木が、かつての巨木を凌駕する存在になろうとしている。果たしてこの状況は、インターネットという新しい土壌に多くの人が思い描いた、既存の既得権益が解放され、オープンで多様性に富んだ社会を生み出すことにつながるのだろうか。多くの開発者の中に、そのメンタリティは残っているかもしれない。ただ、オープンであるということは新しいメディア環境を生きる能力を持つ人とそうでない人とを決定的に分けてしまうのではないだろうか。

これからのインターネット時代においてより重要になってくる主題として、ビッグデータをあげることができるだろう。ビッグデータは、一般的なソフトウェアでは解析することのできない膨大な量の情報である。ビッグデータを利用した代表的な例として、Amazon のユーザーのアクセスログや購入履歴、似たようなユーザーの履歴を元にしたおすすめ商品⁷や、メール解析に基づく Gmail の広告⁸などがある。その他、情報ソースの種類としては、Suica などの利用履歴、気象情報、ソーシャルネットワーク、メール解析、購入履歴など多くの種類が存在している。2012 年の時点で、毎日 2.5 京バイト⁹が生成されている莫大な統計的データは予測可能性を広げ、経済や科学などさまざまな分野での利用が試みられている。情報を解析する側に立ってみれば非常に有用で興味深いものではあるが、一般の人々にとってみれば、ただ分析に基づいた商品売りつけられるだけということになる。それどころか、口座情報、アクセスログ、購入履歴、医療履歴、SNS 上の情報など何かしらのデータベースにアクセスしている個人情報が統合され、スマートフォンなどから送信されている GPS データと照合することができるようになれば、街を歩いている人一人一人の情報を即座に拾うことさえ可能になる。現時点では、それぞれのサービスが保有する個人情報はそれぞれのプライバシーポリシーや個人情報保護法によって護ら

❖5 スマートフォンをめぐる開発競争については以下を参照。フレッド・ボーゲルスティン、依田卓巳訳『アップル vs. グーグル どちらが世界を支配するのか』新潮社、2013 年

❖6 情報通信ネットワーク産業協会の「2013 年度 携帯電話の利用実態調査」によると、スマートフォンの普及率が前年 38.8% から 48.2% に増加した。<http://www.ciaj.or.jp/jp/pressrelease/pressrelease2013/2013/07/24/10785/> (最終アクセス 2013 年 12 月 1 日)

❖7 協調フィルタリングと呼ばれる、多くのユーザーの嗜好情報を蓄積し、あるユーザーと嗜好の類似した他のユーザーの情報を用いて自動的に推論を行う方法が Amazon では利用されている。データが多ければ多いほど有効に機能する。

❖8 過去のメール内容から趣向を予測し、広告を選択的に表示する仕組み。Gmail 以外に、ウェブを Google 検索したキーワード、アクセスしたサイト、Google プロフィール、Google+、その他の Google アカウント情報を使用している。

❖9 25,000,000,000,000,000 バイト = 25,000,000 ギガバイト = 25,000 テラバイト

- ❖10 2010年から2014年1月まででも、100近くの買収・合併を行っている。その中にはIT関連企業以外に、軍事ロボットを開発している企業なども含まれている。
- ❖11 特定秘密保護法の背景に、YouTubeにおける尖閣諸島中国漁船衝突映像流出事件のように、インターネット経由の情報流出に対する危惧が挙げられる。しかし、この法案によって、国家が国民の趣味嗜好など個人的な情報までも収集していたとしても、国家がどのような情報を集めているのかを国民が知ることが難しくなった。
- ❖12 1950年に発生した核戦争を経た1984年の未来を描いた小説。テレスクリーンと呼ばれる、双方向テレビによって屋内外問わず、ほぼすべての行動が当局によって監視される監視社会が描かれている。George Orwell, *Nineteen Eighty-Four*, London: Secker and Warburg, 1949.

れているが^{❖10}、Googleの企業買収状況や特定秘密保護法の成立^{❖11}などを鑑みると、特定の権力者があらゆる個人情報を収集することが可能となる未来が現実的に見えてくる。こうした状況は、21世紀的な利便性の高いサービスが提供されるその裏側で起こっていることである。デジタル社会がもたらした利便性は画期的で、それ抜きでの仕事や生活を考え難い時代になってきているが、ジョージ・オーウェル（George Orwell, 1903-1950）が『一九八四年』^{❖12}で描いたよりもしたたかな監視社会が、便利になった日常の背後からにじり寄っているのではなからうか。そうなったときに、デジタル端末と常時接続された状況で暮らしているデジタル世代にはなす術がない。

アナログな時代においては、テクノロジーや機械の仕組みを知ろうとする際、分解することでその仕組みをある程度は理解することができた。しかし、現在のテクノロジーは、プログラム言語を理解しない者にとっては完全にブラックボックスと化している。そのため、そのような人々はシステムを運用する側のモラルを信用するしかない。今後、デジタル技術に依存しながら生きていかざるを得ない人々とデジタル社会のインフラを作る側とのデジタルデバイドは確実に進んで行く。

2. デジタル空間における自己

これまで情報環境自体の変化について考えてきたが、同時に「自分」という存在がこれまで以上に複雑な状況におかれていることに気が付く。SNSやブログなどでインターネット上の自分を示すアカウントやID、ビッグデータに蓄積された自身の痕跡から解析された自分像など、身体性を伴う現実空間の他に、自分に類するものが平行に存在するといった状況が生まれている。インターネット上に自分で設置したアカウントなどは、自身で作成、編集しているため、自己の統御下にある。そのため自ら自分の見られ方がある程度設計していくことができるので、自分のアカウント上で示される内容と自分像が著しく食い違うことは少ない。一方、ビッグデータ上に自分に関わるどのような情報が集められているかを知ることにはできない上、すべての行動が自分の性格や趣味趣向と一致しているとも限らない。そのため、データ上から解析された自分像と、自分で思っている自分像とが乖離するといった事態が起こる。SNSなどに設置されたアカウントなどと決定的に異なる点は、自分で自身の見られ方を編集できているか、そうでないかである。現状として、個人に関わるデータはそれぞれのサービスのプライバシーポリシーによってその使用に制限を設けられているが、そのようなモラルが解体されると仮定すれば、統合されたビッグデータを元に個人が個人に判断される時代が到来するといえる。今後、インターネット上の身体性を伴わないデジタル空間に形成された自己が、現実空間の自身を規定する時代になった時、仕事、結婚、友人関係などあらゆる場面において、データに基づいたヒエラルキーが形成されていくのだろうか。そこには色彩のグラデーションを段階的にしか表現できないバイナリー・データの隙間から生じるボイド（虚空）が

広がっているように思える。そのような時代の中で、デジタル化しえない身体や感情はどのような役割を果たすのだろうか。

3. メディア環境へ向けられたアーティストの視座

ドイツ現代写真を代表するトーマス・ルフ (Thomas Ruff, 1958-) の「jpeg」シリーズは、現代のメディア環境に対する態度を明確に宣言している。インターネット上の画像をダウンロードしているときに思いついたというそのシリーズは、9.11のワールドトレードセンターや水爆実験などのインターネット上で見つけた画像の解像度をできる限り落とし、拡大してプリントしたものだ。美しさや構図などの観点から見れば、画質は悪くイメージはありふれたものである。しかし、それ故に背後にあるルフの視点が立ち現れてくる。インターネット上に無数に存在し、撮影者のことをほとんど意識せずに見ることのできる画像、それが今日の大多数にとって最も身近な「写真」となっていることを示し、一人一人の中で知らず知らずのうちに起こっている変化に対して自覚的であることを促しているのだ。

一方で、アメリカの貧困地区の日常が写し取られた Google ストリートビュー上の画像を集めたダグ・リカード (Doug Rickard, 1968-) の《ニュー・アメリカン・ピクチャー》は、画像採集のみでドキュメンタリーフォトを構成し、現代における写真家の意義を改めて問いなおそうとした。また、世界各国の若手写真家 50 名の作品を集めて世界巡回した「reGeneration: 50 Photographers of Tomorrow」展 (2005 年) では、今という時代感を映し出した作品が数多く紹介された。中でも、エヴァ・ローターライン (Eva Lauterlein, 1977-) による、一人のモデルを複数の角度から撮影した写真を巧みに合成し、元の人物との同一性が失われたポートレートのシリーズ「キマイラ (怪物)」(2002-2004 年) や、街中にある人々が注意を払わない建造物に注目し、写真から建造物をデジタル処理で塗りつぶし、抹消することで、都市空間上のボイド (虚空) を強調したモーレン・ブロードベック (Mauren Brodbeck, 1974-) の《Urban Scope》(2004 年)、都市の大通りに一日中機材を設置し、通行人を撮影した 8000 枚にも及ぶアーカイブから、性別、服装の色や模様など視覚的な類似性だけで人々を分類し、その分類にそって人々を再配置したパブロ・ズレタ・ザール (Pablo Zuleta Zahr, 1978-) のシリーズ作品など、デジタル技術を巧みに利用しながらも、デジタル世代の中で揺らぐアイデンティティや実空間における不在性など時代感を巧みに写し取った作品が多く紹介された。^{❖13}

国内では、モニタのキャプチャ画像などを展示した新津保建秀 (1968-) の「\風景+」展では、デジタル端末の画面やその先のデータ上の世界が日常的な風景の一部となっている現代の風景論が展開された。さらに若い世代では、アニメーションのキャラクターなどネット上に散らばる画像を集積し、作品化する梅沢和木 (1985-) の二次創作性や、自宅や机の上などプライベートな場所の写真から 3D 空間を起した作品やポルノ画像のデータをテキスト編集ソフト

❖13 詳しくは以下を参照。ウィリアム・A・アーウィング、ナタリー・ヘルシュドルファー、ジャン＝クリストフ・ブレイザー、小林美香訳「リジェネレーション」赤々舎、2007 年

で文字列に変換し、プリントアウトし、額装した作品など、現実空間とデジタル空間をトートロジーでつなぐ谷口暁彦（1983-）、サーモグラフィカメラによるポートレートという、電子的な観察手法を用いて生物と物質の狭間をあぶり出す平澤賢治（1982-）など、「今」を映し出す表現が鋭い時代感覚から生み出されている。

4. 時代への従順なりフレクションともがき

しかし、デジタル世代の作家は時代性を反映した表現を行いながらも、同時にもがいているのではなかろうか。フラットなタッチパネル上でアクセスするデータの世界、パラレルワールドで増殖する自分像など、これまでとは異なる身体感覚に引き込まれていく時代の流れの中で、手触りや物質感を再評価し、取り戻そうとする感性が育ちつつある。そのような若手作家の例として、Nerhol と横田大輔を取り上げてみたい。

彫刻家の飯田竜太（1981-）とデザイナーの田中義久（1980-）によるアーティストユニット Nerhol は、漫画や写真集など、画像が印刷された紙面の一部を抽出しながら一枚ずつ刻み、紙の彫刻を作り出してきた。近年、一定時間モデルを定点撮影した数十枚の写真をプリントし、重ね合わせ、手作業で紙を一枚ずつ刻みながら撮影時の時間を掘り返していくポートレートシリーズ「Misunderstanding Focus」（2012年）を発表している。最終的な作品からは、撮影時間中にわずかに動いた人間の揺らぎがいびつな表情となって立ち現れてくる。手作業というプロセスを経ずとも、デジタル技術を用いれば簡単に何度もやり直すことができる。しかし、あえて手作業で行うことで、作家自身が図像との対話に否が応でも集中せざるを得ない。その集中力が、現代の時間的キュビズムを物質的な量感と共に表現している。

一方、横田大輔（1983-）は、ソラリゼーションや高温現像、焼き込みなどの暗室処理と Photoshop などのデジタル処理を横断的に行い、木炭画や石版画のような荒々しさと写真の写実性が混在する作品を制作している。光と乳剤による化学反応や、傷や色を与える物理的な処理、デジタル加工などによるイメージは、手触りを感じさせる。記憶や感情、聴覚などが混ざり合いながら生まれてくる視覚的イメージ。そうした自身の中で沸き立つ論理的に説明できないイメージの具現化として横田の写真は「作り」出されている。自身の内面を深く探りながら、印画紙やフィルム、デジタルデータと対話し、制作している姿が見えてくる。

彼らのそうした制作の背景には、デジタル技術が常にそばにありながらも、物質性にこだわり、自身の内面や行為への深い思索を試みる姿勢がある。それは情報が増え、加速する社会において貴重なものとなりつつある。こうした、新しい時代に生まれてくるものと失われていくものが交差する表現の中に、これからの読み解く手がかりがあるように思える。そうした変革期において制作を続ける人々とその表現を、今後も継続的に観察して行く必要がある。

❖14 横田の制作過程については以下を参照。大山光平「INTERVIEW Vol.01 横田大輔 / Daisuke YOKOTA」
<http://parapera.net/interview/daisuke-yokota.html>
(最終アクセス 2014年1月5日)